「生きるのも死ぬのも主のため」ローマ１４：６－１２　　堀田修一　　２４・９・８

Ⅰ　生きるにして、死ぬにしても、私たちは主のものです。

１.「特定の日を尊ぶ人は、主のために尊んでいます。食べる人は、主のために食べています。神に感謝しているからです。食べない人も主のために食べないのであって、神に感謝しているのです」：６。「日を守る人」も「食べる人」も「食べない人」も主のために神に感謝して行っているのですから、それで十分と言う理解が大切。私たちも、聖書に明確に記されていないことで、意見が分かれ、それぞれの確信と良心的な感謝、主体的な決断に対して、正しい理解と十分な尊敬を払う必要がある。意見が違っても人格を敬い受け入れ合うことを神は喜ばれる。

２.「私たちの中でだれ一人、自分のために生きている人はなく、自分のために死ぬ人もいないからです」：７。具体的な判断、意見は違っていても、突き詰めれば、私を愛し私の罪の為に十字架で死に復活された主の為にすべてのことを行いたいという動機は一つです。私たちを愛し私たちの為に、ご自身を神に献げ十字架で死に復活された主を信じ主を愛している人は、自分の為に生きるのではなく、主のために生き、自分のために死ぬのではなく、主の為に死ぬ人に変えられ続けます。

３.「私たちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死にます。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです」：８。「主のために生き」、「主のために死ぬ」というあり方は、「私たちは主のものです」という本質的からおのずと生まれてくるものです。主が私たちの全ての罪の為に十字架で流された血は、私たちを永遠の滅びから買い戻す（贖いの意）代価でした。それ故、主を信じる私たち自身は、もう自分のものではなく、恵みとまことに満ちた御主人である主のものなのです。※証し

４．私たちの救いの為に「キリストが死んでよみがえられたのは、死んだ人にも生きている人にも、主となるためです」：９。キリスト者の本質的なあり方はキリストの生と死に基づくものです。９節は、初代教会の信仰告白と思われます。私たちの死と生のすべての主＝恵みとまことに満ちた支配者、主になるためにキリストは私たちの為に死んでよみがえられたのです。キリストが私たちの真の主（ご主人、支配者）となられるときに、私たちは、主を信じる前までの主人＝罪、死、滅び、悪魔、ある人間、宗教団体による支配から解放されるのです。キリストを主とし主からのみ支配していただくときに「人を支配する人生、人から支配される人生から」も解放され、主を中心に互いに仕え合う（意見が違っても人格を受け入れ合う）関係、教会、共同体が生まれます。※証し。45 年の牧会の中で主に教えられた真理の恵み。夫と妻の関係の鍵のみことば＝「キリストを恐れて、互いに従いなさい（互いに仕え、愛をもって正直に語り合い対話をし、支配しない、支配もされない」（エペソ５：２１）。親子の関係＝子は「父と母を敬え」（エペソ６：２）。敬うとは、言いなりになるのではなく、感謝と尊敬を失わず、親に自分の願いを正直に語る。「父たちよ。子どもたちを苛立たせてはいけません（子どもの人格を無視し、子どもの言い分を聞かない支配者になってはいけない）。その子たちが意欲（神が下さる自主的なやる気）を失わないようにするためです」（コロサイ３：２１）。親も子も支配しない、支配もされない。主の教会、共同体の関係＝「異邦人の支配者たちは人々に対して横柄にふるまい、偉い人たちは人々の上に権力をふるまっています。あなたがたの間（真の支配者である主を中心とする教会の中での関係）では…皆に仕える者（支配しないで仕え合い、愛をもって対話をする者）になりなさい」（マタイ２０：２５，２６）。「あなたがたは、代価（主の十字架という血＝世界中のお金よりも高価な主の贖いの命、血）

を払って買い取られたのです（主のものとしていただいたのです）。人間の奴隷（人に支配される者）となってはいけません」（Ｉコリント７：２３）。恵みとまことに満ちた主に支配され（心に主の支配があることは、心に神の国＝神の支配が生まれている恵み）、人を支配せず、人からも支配されない。私たちを支配される主から愛と勇気をいただいて、相手と対話ができる日を祈りつつ待ち望みましょう。

Ⅱ　どうして、自分の兄弟をさばく（非難する）のですか、見下すのですか

１.「それなのに、あなたはどうして、自分の兄弟をさばくのですか。どうして、自分の兄弟を見下すのですか。私たちはみな、神（真の支配者、全く間違いのないさばきをなさる唯一の方）のさばきの座に立つことになるのです」：１０。※自分の事を棚に上げる証し。このキリスト者の本質とキリストこそ絶対的な主であることを理解したなら、私たちはもはや自分の兄弟姉妹であるキリスト者をさばくこと、見下すことはできないはずです。主にある兄弟姉妹をさばく、見下すことは、自分の事を棚に上げ、自分が今日まで、あわれみと愛に満ちた神にいかに赦され続けて来たかを忘れ、謙遜と神と人への感謝を忘れ、自分を神の座に押し上げている最大の罪、神の前に重大な高ぶりの罪。私たちはみな、将来の主の再臨の時に「（私たちの心、言動のすべてをご存知の）神のさばきの座に立つことになるのです」。※このみことばは、主が命じられた正しい教会戒規を否定するものではない。※証し。神は義と愛の完璧なバランスのある方→神による三つの段階を踏む配慮：「もしあなたの兄弟があなたに対して罪（神の目にも大きな罪）を犯したなら、①行って二人だけのところで指摘しなさい。その人があなたの言うことを聞き入れるなら、あなたは自分の兄弟を得たことになります。②もし聞き入れないなら、ほかに一人か二人、一緒に連れて行きなさい。二人または三人の証人の証言によって、すべてのことが立証されるようにするためです。③それでもなお、言うことを聞き入れないなら、教会に伝えなさい。教会の言うことさえも聞き入れないなら、彼を異邦人か取税人のように扱いなさい（教会から除名し、その人が悔い改めて神に立ち返り教会に再び迎えられるように祈り続ける）」（マタイ１８：１５－１７）。

２.「次のように書かれています。『わたしは生きている。―主のことばー。すべての膝は、わたしに向かってかがめられ、すべての舌は、神に告白する。』ですから、私たちはそれぞれ自分について、神に申し開きをすることになります」：１１，１２。将来、いつかは分かりませんが神の時に主イエスが再臨されます。その時に、神の全く正しい審判（さばき）があります。その時、すべての人が、神の前に「自分の悪い心の思い、動機、行いの全て」を神に申し開きをし、弁明をすることになります。このみことばのポイントは「それぞれ自分について」神に申し開き、弁明をするということです。つまり、神の審判の時に「あの人はこうでした、別の人はこんなひどい人でした」と私たちが神に申し上げるなら、神はこう言われるでしょう。「この最後の厳粛な審判の場では、あなた以外の人の事ではなく、あなた自身の心の良くない思い、悪い行いについて申し開きをしなさい。他の人は、わたしが正しくさばきます」と。それ故、この地上で、他の人たちの理解、意見、考え方、態度について先走って、あれこれと批判するのではなく、自らの内に真の確信を持ち、自らの言動に責任を取る者となれるように祈りたい。

Ⅲ　結び。私たちは、主に愛され、主に救われ、主のものとされた（滅びから買い戻された）ので、主に心から感謝し、生きるとすれば主の為に生き、死ぬとすれば主の為に死ぬ（迫害があっても主への信仰を捨てず死を迎え、主が迎えて下さる天国に行く）者とされますように。私たちが、神の最後の真の正義の審判をおびえて生きるのではなく、この地上でご聖霊が気づかせて下さる罪を神に正直に告白し悔い改め、主の十字架の恵みにより、完全な赦しときよめをいただいて歩み、主の再臨を待ち望めますように！